

第14回世界農業遺産勉強会概要報告

- ◇開催日時 平成29年4月20日(木) 19時～21時
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 大西(飛鳥小)、山方(都跡小)、祐岡(阪南大学)、中澤(奈良教育大学)
- ◇内容

第5章「農業・漁業の持続可能性を問う」 嘉田良平

担当：山方先生

- ・現代の農業や水産業が持続可能性を失いつつある。
- ・特に食料自給率が極端に低い日本(カロリーベースで39%：平成28年度)
- ・豊かな食生活と飽食、そして大量の食料廃棄という現状
- 農業と漁業の「持続可能性」とは、資源を劣化させることなく、長期にわたって生産性を維持できること
- ・30年くらい前までは、環境と食料・農業は相互に矛盾することなく両立可能であると考えられてきた。しかし、近年、地球環境の変化が農水産産業(食料生産)に大きく影響するとともに、農業・食料供給のあり方が、環境に影響を及ぼすという問題が顕在化するようになってきた。
 - 農業・漁業を自然生態系や環境と調和させ、食の安全・安心を確かなものにするのが重要
 - 食料自給率を高め、食料の輸入を減らす(食の安全・安心)

【地球環境変動と農業とのかかわり】

- ・農業は本来、自然の力を最大限に生かし、物資循環のメカニズムを取り込むことによって環境保全に寄与する産業である。
 - 農業者による経済活動と環境保全の融合
- しかし、化学資材の多投入・大型機械化による単作化 → 自然環境や生態系に対する負荷の増大
- 地球環境を悪化させる原因の一つに(農地拡大・過耕作・過放牧。不用意な灌漑)
- 土壌侵食・水質汚濁・地下水の枯渇・砂漠化を招く
- さらに農村の貧困化が都市への貧民の流入を引き起こし、社会不安の増大に
- ・日本の農業 後継者不足、中山間地で耕作放棄地の増加

【なぜ日本農業は「非持続的」なのか】

- ・地球規模で農水産産業資源の持続可能性を根本から見直す時代
- ・1985年以降、日本農業の生産力が低下
- ・過疎化・高齢化による後継者・担い手の不足
- ・現代日本の食料と農業システムは非持続的な様相を強めてきている
- ①食料自給率が非常に低い
 - フードマイレージやバーチャルウォーターの量が極端に大きい→地球環境に大きな負荷をかけている
- ②農業生産にともなう環境負荷が大きい
 - 化学資材の多投入、森林伐採、非農地への転用→生物多様性の喪失・生態リスクを高める
- ③食品の廃棄率の高さ
 - 世界中には飢餓や栄養失調に苦しむ人々が8億5000万人以上 倫理的な課題
 - バイオマス資源利用にかかわる課題、流通システム的な課題
 - 廃棄食材の焼却処分にともなうCO2の排出

→ できるだけ未利用資源（食料廃棄物）の有効活用

農業生産方法と低投入型・循環型への転換が求められる←オーガニックによる付加価値も

・今後の戦略

- ①環境保全型農業の採用
- ②農業や水産業が経済的・社会的に成り立つ条件づくり
- ③食の安全・安心を担保する生産者・食品産業の信頼感の向上

【楽観できない食料需給の見通し】

これからの食料需給の見通しには、かなり厳しいものがある。

食料の需要は増えるが、供給はあまり伸びない。

市場価格の上昇により、途上国での栄養失調・飢餓人口の増加、格差の拡大が顕在化する

◇食料安全保障に影響を与える5つの変数

- ①人口増加
- ②穀物需要の増加
- ③生産基盤の不足・劣化
- ④水産資源の世界的枯渇

世界の海面漁業の52%が生物学的な限界、16%は過剰漁獲、7%は枯渇状態（2003年度）

- ⑤地球規模の環境変動

◇3つの構造変化

(1) 地球温暖化の食料生産への影響

水資源の確保がポイントに

降雨パターンの偏在化と集中化によって、農業に使うことのできる水資源量は減っている。

- ①気温上昇と降雨パターンの変化による、干ばつと集中豪雨の同居
- ②生態系の異変や破壊、外来種の侵入による生態リスクの拡大
- ③農業生産性の大幅な低下（コメの単収が40%低下する）

日本を含めてアジアの稲作は、少なくとも2~3000年以上の長い歴史を持ち、持続可能性という点で世界の優等生であった。

④水産資源への影響

世界全体では、一人当たりの耕地面積は、人口増加に反比例して減っている。

(2) バイオ燃料と食料との競合

主要農業国であるアメリカ・ブラジル・中国において、農地がバイオ燃料向けに大幅に転用

アメリカ トウモロコシからのバイオエタノールの生産を拡大

ブラジル サトウキビからバイオエタノールを生産

- ・バイオ燃料増産を目的としたプランテーション造成のために熱帯雨林が破壊されている
- ・ビジネスとしては儲かっているが、本当にバイオ燃料はCO₂の削減に貢献するのだろうか？

◇バイオ燃料の生産と貿易において守るべきルール

- ①生産・加工・輸送プロセスでのCO₂排出量を追加的に増加させないこと
- ②農地転用、森林伐採などによる生態系の破壊、土壌劣化など、新たな環境破壊を引き起こさない
- ③主食の確保という点から、とくに零細農民や貧困層の食料安全保障を脅かさないこと

(3) 食品リスクの拡大

経済のグローバル化による、O-157、鳥インフルエンザ、BSEなど食に深く関係する感染症の

国際的な拡大

【日本農業の未来はどうか】

①担い手の確保

農業や水産業の担い手、とくに若い後継者がいない

都市住民のニーズや価値観の変化（ESDによる価値観の育成）

食生活の変化や輸入食品の増加とともに、食の安全。安心を求める声の拡大と日本農業への期待

②環境保全

できる限り環境負荷を抑えつつ、自然資源を適正に管理し有効に活用する新しいシステムの構築
農林水産業そのものの営みを通して、自然資源を豊かな状態に維持管理する必要がある。

【里山をどのように守ればよいか】

中山間地での耕作放棄地の増加、里山・棚田の荒廃

→ 補助金頼みでなく市場原理の枠組みの下で、日本の農業・農村を活性化させる

○都市と農村の連携

①これまでの生産効率一辺倒とは異なる多様な農地の活用法の模索

- ・安全な農産物の提供によって付加価値を高める
- ・教育面や心の癒しの価値を通じての交流
- ・ふるさとの提供

②耕作放棄地や遊休水田の活用法

- ・自給飼料の生産拡大や牛の放牧

○農業と地域経済の再生にむけた見直しの必要性

①農林水産業と資源・環境との関わり（環境負荷、リサイクル、生態系破壊）

②日本農業と私たちの食生活との関係（生産と消費との距離、栄養バランスなど）

③社会経済システムとしての農業・農村のあり方（資源の保管理、担い手の確保、産業・雇用づくり）

○これからの戦略的課題

①生産技術の総点検と「安全証明」を具体化すること（トレーサビリティ）

②足元から農業と環境のつながりを見直す（地産地消、スローフード）

③食生活の視点から農業のあり方を捉える

【私たち消費者にできること】

これからの食育の基本

①地産地消：地域で取れたものを地域で食べる

②旬産旬消：旬の産物をその季節のうちに食べる

③土産土法：その地域で取れた食材を地域独自の調理法によって調理すること

食の豊かさとは

①食卓のにぎやかさ：食材、メニューの豊富さ、栄養摂取量、おいしさなど

②農業や水産業が持続可能であるという点：環境調和型への再生

③生産資源と生産現場の環境の保全

生産者の環境保全への取組に対して消費者がきちんと評価し、優先的に選んだり支払ったりすることが大切

